

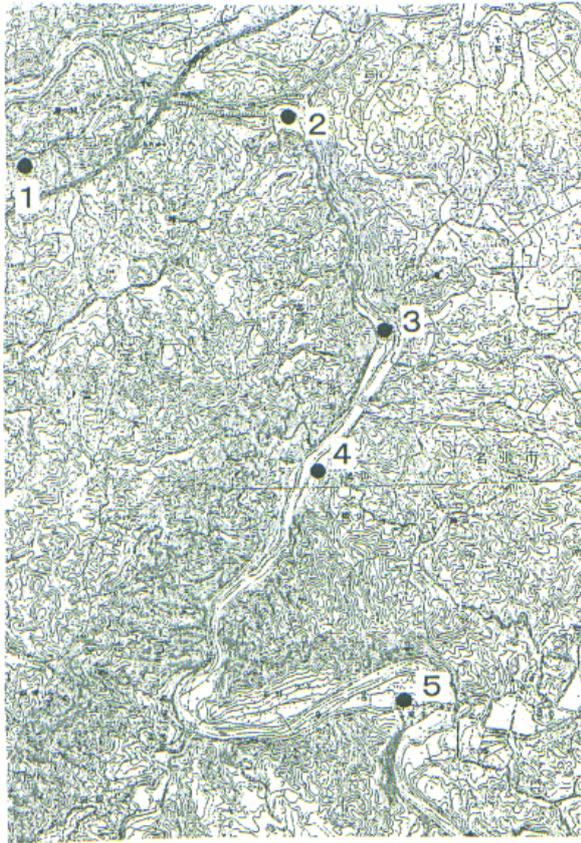
## 鵜山(うやま)遺跡第2次調査 現地見学会資料(2002年9月1日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
調査協力	山添村教育委員会
所在地	奈良県山辺郡山添村大字鵜山スズカワラ
調査内容	縄文時代早期の集落遺跡 竪穴住居跡と推定される土坑、集石遺構(屋外炉跡)、その他
調査面積	500㎡
調査期間	2002年5月8日～同年9月中旬
現地説明会	2002年9月1日午後1時～3時

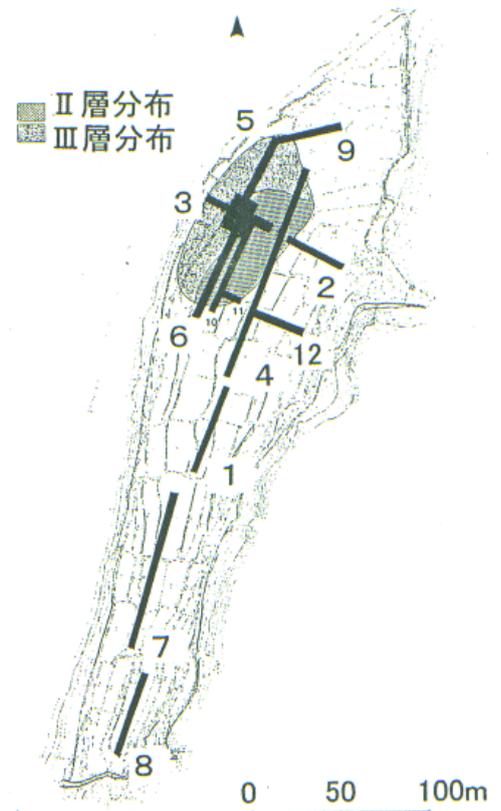
### 1. はじめに

今回の調査は、奈良県東部農林振興事務所の計画した県営ほ場整備事業にともなう発掘調査である。昨年度秋、事業予定地である河岸段丘平坦地全体に12本のトレンチを設定し、第1次調査を実施したところ、縄文時代早期および後期の遺物を含む包含層のひろがりを確認され、その一画より集中して、縄文時代早期の住居跡と思われる遺構が複数検出された。その結果、遺跡の良好な遺存状態とその重要性が判明したので、縄文時代包含層の確認された部分を保存する方向で、事業計画については設計変更がおこなわれている。

本調査は、遺跡の保存を前提としながらも、試掘調査で検出された主要な遺構の精査と、そのひろがりを確認するために実施されることとなったので、住居跡と思われる遺構の検出された部分を中心に、周辺を拡張する形で調査範囲を設定した。調査範囲内は、後世の水田による階段状の削平のため、場所によって遺存する堆積が異なるものの、層位的調査の結果、5つの面で遺構の存在を確認している。今回発表するのは、その中でも下位になる面で、試掘調査で検出された遺構の続き、および同期の関連遺構である。その内容は、少なくとも5基以上の竪穴住居跡と1基の集石遺構からなっており、比較的安定的に人々が生活をした縄文時代早期の集落跡であることが判明した。



『国土地理院発行 1/25,000 地形図(名張)(月ヶ瀬)を使用』



### 遺跡周辺地図

1.遅瀬前田 2.大川 3.広瀬 4.鶴山 5.薦生  
チ

### 調査区配置図

本調査は中央黒塗り部分、添付番号は試掘トレンチ

## 2. 調査の成果

**基本層序** 遺跡全体を構成する堆積は、大きく4つにわけて理解することができる。上位の新しいものから、下位の古いものへとむかって下記の層序となる。

I層:水田床土・水田造成土

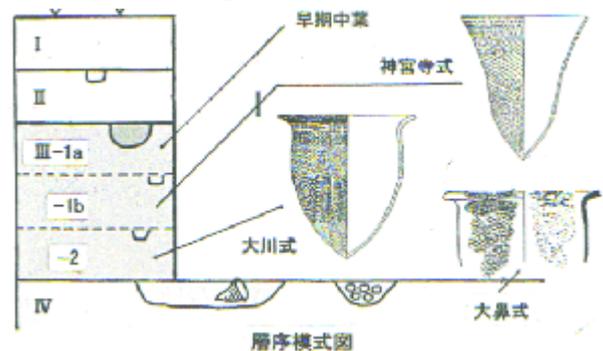
II層:黄褐色土層(縄文時代早期後半~後期前半:約6500~3500年前[C14年代])

III層:黒褐色土層(縄文時代早期前半:約9500~7000年前[C14年代])

IV層:黄灰色砂層(縄文時代早期初頭:約10000年前[C14年代])

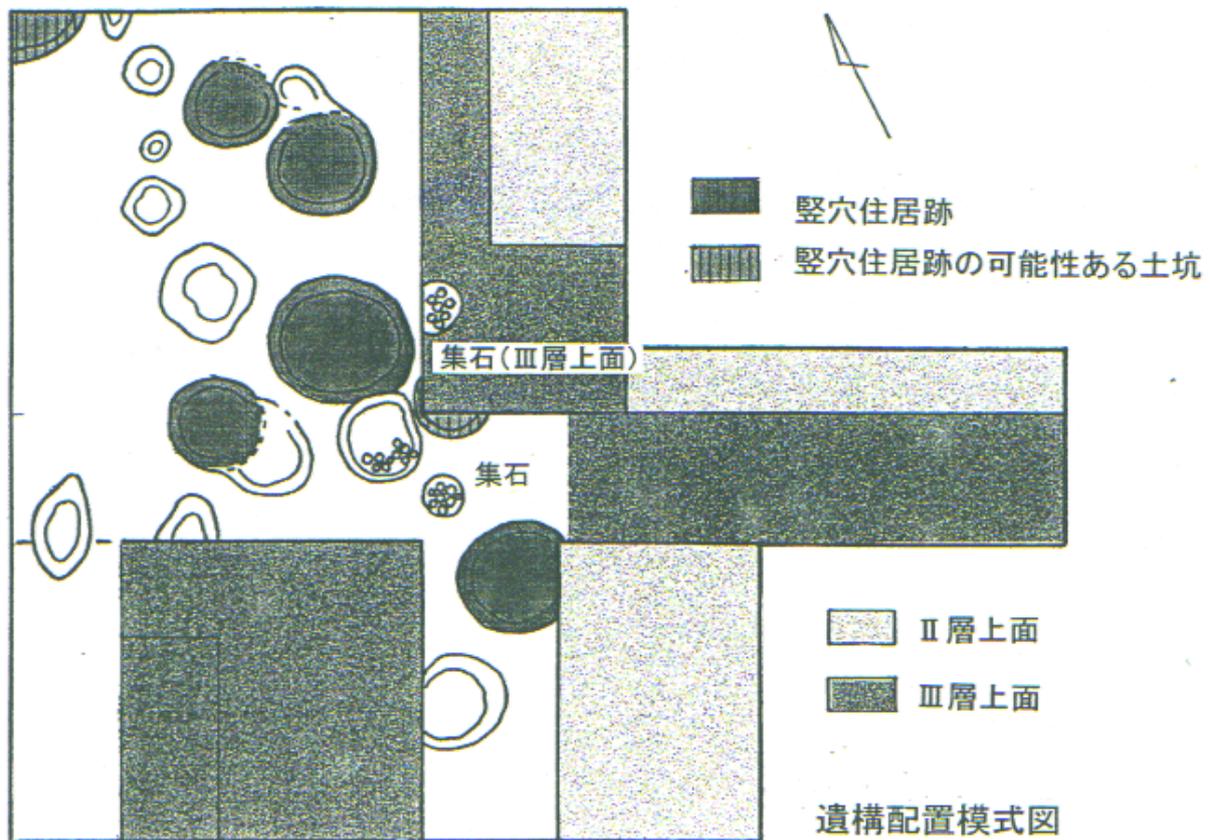
特に堆積に厚みのあるIII層は、さらに3つに分けることが可能で、上位のIII-1a層には早期中葉の未命名型式土器、中位のIII-1b層には神宮寺式土器、下位のIII-2層には大川式土器が主に含まれており、概ね層位的に土器型式の年代の変遷をたどることができる。IV層は一部のみの発掘で

あるが、大川式よりもさらに古く、押型文土器の起源とされる大鼻式土器が出土している。



遺構 各層の上面で遺構を検出しており、縄文時代のものは、Ⅱ層からⅣ層上面までで合わせて5つの遺構面がある。ただし、遺構の存在が顕著なのは、後期の土坑の数基あるⅡ層上面と、竪穴住居跡の可能性もある土坑と集石遺構(炉)の確認されたⅢ-1a層上面、それに今回発表する早期前葉の竪穴住居跡群および集石遺構(炉)のあるⅣ層上面とである。

Ⅳ層上面の遺構の主だったものは、竪穴住居跡と推定される土坑5基と、集石遺構(炉)1基であり、いずれもこの遺跡の主体である大川式土器の用いられた頃のものとして推定される。



竪穴住居跡は、直径3.0~4.0mの平面円形、深さ20cm前後で、底面が平坦な皿状の土坑を中心にして、その内部のほか、周囲にも柱穴と思われるピットのいくつかを巡る簡略なもので、確実に炉といえるような施設は見当たらない。調理は外でするとしても、照明や暖房をどのようにしたのかは不明である。このような構造的特徴は、三重県鴻ノ木遺跡などで検出されている竪穴住居跡などと共通するものではあるが、そこで顕著な燻製施設ともいわれる「煙道付炉穴(連結土坑)」は確認できていない。複数ある竪穴住居跡は、それぞれ重複せず存在しているものの、近接する二者間の距離が1.0mにも満たないものがあることから、同時に存在していた竪穴住居は、せいぜい1~2棟程度であったと思われる。

集石遺構(炉)は、直径約1.0mの平面円形を呈し、すり鉢状に掘り窪めた土坑に焼けた礫などの集まったものである。南太平洋地域の民族例から、蒸し焼き料理に用いられたものと想定されることが多い。近隣の大川遺跡にも約10基確認されており、いずれも屋外に認められる。すべての日常の調理がこれを用いて行われたかはわからないが、屋内には調理施設がないことから、各戸の住人が寄り合い、このような屋外炉を用いて共同で調理したと思われる。

遺物 出土した遺物の主だったものは、縄文土器、石器である。

縄文土器は、早期のものが大半を占め、特に円棒に彫刻を施し、土器面に回転施文した押型文土器でも前半期のものが多い。土器の型式名で古い順に表現すると、大鼻式、大川式、そして神宮寺式といったものであり、それぞれ約10000年前、9500年前、9200年前のものとして推定されている(C14年代;補註)。大川式土器は、近隣の大川遺跡出土の土器を標式として設定された土器型式であって、両遺跡で共通のものが用いられていることから、同じくらいの時期に2つの遺跡が残されたことがわかる。ただし、大川遺跡には大鼻式土器がわずかで、鶴山遺跡にはそれが比較的多くあることから、鶴山のほうがより古く、積極的な活動の場となっていたことが窺われる。

なお、鶴山遺跡では、他に類例のない遺物として、大鼻式土器に似た形態をもつ表裏縄文土器(口縁部の内外面ともに縄文のあるもの)や円孔文土器(口縁部に焼成前の穿孔が巡るもの)が出土しており、そのような特徴をもった草創期の土器群との関連を考える上で貴重な資料を提供している。また、Ⅲ-1a層から出土した早期中葉の縄文土器も、他に類例が川上村宮の平遺跡にしかなく、型式名の未だないもので、今後の編年研究の材料として重要な資料である。

石器は、石鏃(矢じり)、楔形石器(石器製作時の残り物?)がそれぞれ100点以上あり、剥片石器の主要なものとしてあるほか、槍先に用いられたであろう尖頭器などもある。また、磨石や石皿といった植物質食糧加工具と考えられる礫石器も多く出土している。その種類や量からは、周辺の山間部で動物の狩猟、植物の採集などを積極的に行って食材としていたことが窺われる。

剥片石器の石材は、サヌカイトと呼ばれるものが大半を占め、奈良県と大阪府の境に位置する二上山より運ばれたものである。直線距離にして約80kmをどのような経緯によってここまで運ばれてきたのかは不明であるが、今後の解明の鍵となる資料である。

### 3. まとめ

鶴山遺跡の所在する山添村は、縄文時代でも古い時期の遺跡が集中することで著名である。実際、この遺跡を取り巻くようにして流れる名張川を1.2kmも下れば、後期の竪穴住居跡が確認された広瀬遺跡、さらに1.8km下ると、竪穴住居跡ほか集石遺構が多数検出された大川遺跡が知られており、河川に沿って開けた場所には、くまなく縄文時代の遺跡の存在することが予想される中、そのひとつである鶴山遺跡における、縄文時代の人々の活動の実態が判明したことは大きな成果といえる。

具体的な成果としては、大川遺跡にはわずかしか認められなかった大鼻式土器が、少なくない量出土しており、近隣の大川遺跡とは年代的に重なりつつも、ここではより古くから積極的に土地利用が行われていたことが明らかになった。第2点目は、大鼻式土器や大川式土器の用いられた頃(約10000年前)の竪穴住居跡と推定される土坑5基以上と、屋外の集石遺構1基を確認したことで、大川遺跡と同様に、この時期の集落の一端が判明した。第3点目は、当該期の三重県や愛知県に分布を見せる「連結土坑(煙道付炉穴)」と呼ばれる遺構が確認できなかったことで、このことにより三重県の大鼻遺跡や鴻ノ木遺跡の竪穴住居跡に放射状に多数取り付くよ

うなあり方とは異なって、調理施設に地域的な違いがあった可能性を指摘できるかもしれない。第4点目は、鶺山遺跡より出土した大鼻式土器に類似した表裏縄文土器や円孔文土器、それに早期中葉の土器は、他に類例の稀少なものであって、今後の研究にとって貴重な資料となるものである。

いずれにせよ、縄文時代早期における鶺山遺跡の集落の様相が明らかになったことによって、同じ名張川流域の大川遺跡や広瀬遺跡とあわせ、約1万年前当時の人々の活動を、具体的に描きうる材料が増えたのは確実である。このことは、地域の歴史にとってばかりでなく、定住性を高めつつある縄文時代早期という時代を知る上でも、一つのモデルとして重要なものとなるだろう。

補註：記載の年代(C14年代)は、遺跡より出土した炭化物を用いて計測されたものである。これを「放射性炭素(C14)年代測定法」といい、現在では一般的に実施される理化学的な年代推定法のひとつである。ただし、ここで算出された数値は、別の推定法などで求められた数値との間にズレがあり、古い年代になればなるほど、実際の数値よりも新しく答えが出る傾向にある。そのため、近頃ではINTCAL98というコンピュータープログラムにしたがって、

C14 年代	時代区分	山添村内の遺跡
西暦 2002 年	(現 代)	
1000 年前 2000 年前	(弥生時代)	
3000 年前 4000 年前 5000 年前 6000 年前	縄文晩期 縄文後期 縄文中期 縄文前期	
10000 年前	縄文早期	広瀬遺跡 大川遺跡 <u>鶺山遺跡</u>
13000 年前	縄文草創期	上津大片刈遺跡 北野ウチカタビロ遺跡 桐山和田遺跡
	(旧石器時代)	

「暦年代」に較正し、より実際の年代値に近いものとして表記するのが一般的になりつつあるが、ここではあえて従来通りの測定値を用いて表現した。参考までに暦年代に較正したデータは、下記の通りである。

三重県鴻ノ木遺跡(大川式) 紀元前10700～9250年

滋賀県粟津湖底遺跡(大鼻式～神宮寺式) 紀元前9020～8290年

岐阜県富田清友遺跡(大川式) 紀元前8800～8600年

滋賀県粟津湖底遺跡(神宮寺式) 紀元前8560～8290年

【文献】Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d.Plicht, J., and Spurk, M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000–0 cal BP. Radiocarbon, 40(1), 1041–1083.

コンピュータープログラムCALIB4.3 <http://depts.washington.edu/qil/>

本資料は、調査を担当した岡田憲一(奈良県立橿原考古学研究所)と田部剛士(山添村教育委員会)が作成した。